

答えをすぐに求める時代に 改めて見つめたい「考える力」



日々の暮らしからビジネスシーンまで、今や私たちの生活に大きな影響を与えている生成AI（ジェネレーティブAI）。ここ数年、「生成AIの上手な活用法」や「生成AIのメリット・デメリット」などをテーマにした特集を、さまざまなメディアで目にする機会が増えました。では、弁護士や税理士などの士業（専門家）は、生成AIという存在をどう捉え、どのように向き合っているのでしょうか。ライター小林がLTRメンバーに迫るインタビュー企画。第1回は、弁理士の海田浩明（かいた・ひろあき）氏にお話を伺いました。



弁理士 海田浩明氏

生成AIとの距離が少しずつ近づいてきた？

——ここ数年、生成AIは目覚ましいスピードで進化を続けています。率直にどんな印象を持っていますか？

【海田】正直なところ、かつては生成AIの便利さを理解しながらも、「実際に業務で使うのは難しいだ

ろう」と思っていました。でも、徐々に「生成AIを活用することで、効率化や差別化が図れる」と感じるようになりましたね。

——以前より生成AIとの距離が近くなったような？

【海田】そうですね。よく言われるように、私たち士業が行う業務の中でも、生成AIが得意とするものはありますし、想像を超える成果物やサービスが生まれる可能性も感じています。ただ同時に思うのは、生成AIを使う側の“スキル”がとても大事だということ。特に、「思考力」の部分が気になっています。

——確かに生成AIを使うことで、「自分の頭で考える時間が減った」とも聞きます（私も身に覚えが……）。

【海田】実は私がこう考えたのは、友人から聞いたある話がきっかけだったんです。彼が、某大手カフェチェーン店に入ったときのこと。隣の席に、小学校低学年ぐらいの男の子が座っていて、タブレットで何やら操作をしていた。ふと目に入ったその光景に、「上手に使いこなすなあ」と感心していると、しばらくして宿題らしきプリントを取り出し、タブレットに向かって「この問題の答えを教えて！」と話しかけたそうなんです。それで、すごく驚いたと。

生成AI時代だからこそ問われる「考える力」

——生成AIに宿題を解いてもらっていたんですか？

【海田】まあ、実際のところは分かりません。もしかすると、それ

自体（生成AIを使うこと）が課題だったのかもしれないです。ただ、私はその話を聞いたとき、「考える力」が気になったんです。こんな便利な道具があるなら、使いたくなるのは当然。でも、このまま生成AIに答えを聞き続けたら、極端な話、いつしか何も考えなくなってしまうのかなあと。だからこそ、コントロールしながら上手く使う、そういう“スキル”が重要だと思いました。

——本当にそうですね。たとえば答えをダイレクトに聞くのではなく、ヒントだけをもらうとか？

【海田】はい。答えを導くためのアイデアや考え方のコツを見つける程度に留めておけば、また変わりますよね。逆に、学びが深まることもありそうです。でも、そういうコントロールができるのは、ベースに考える力があればこそ。まずは私たち大人が、そんな上手い使い方や姿勢を示してゆく必要性も感じました。

生成AIを使ううえで、主導権を握るのはあくまでも「人」。海田氏がおっしゃったように、思考力を高めるための相棒のような存在なら、ここから良い変化が生まれるのかもしれない。

さらに、海田氏が生成AIを通して考えたという「言葉」の重要性についてもお聞きしました。技術やデザインを言葉に落とし込む弁理士という仕事。「日本語の正確性」が求められる中で、改めて感じたこととは？ この続きは、WEB（ホームページの連動記事 / 下のQRコードより）にてご覧ください。

（取材・文 / 小林真由美）

本記事の続きは
こちらから
→→



海田氏の事務所HPは
こちらから
→→

